

1

[神戸大・文]

平面上に原点 O から出る、相異なる 2 本の半直線 OX, OY をとり、 $\angle XOY < 180^\circ$ とする。半直線 OX 上に O と異なる点 A を、半直線 OY 上に O と異なる点 B ととり、 $\vec{a} = \overrightarrow{OA}$, $\vec{b} = \overrightarrow{OB}$ とおく。次の問いに答えよ。

- (1) 点 C が $\angle XOY$ の二等分線上にあるとき、ベクトル $\vec{c} = \overrightarrow{OC}$ はある実数 t を用いて $\vec{c} = t \left(\frac{\vec{a}}{|\vec{a}|} + \frac{\vec{b}}{|\vec{b}|} \right)$ と表されることを示せ。
- (2) $\angle XOY$ の二等分線と $\angle XAB$ の二等分線の交点を P とおく。 $OA = 2$, $OB = 3$, $AB = 4$ のとき、 $\vec{p} = \overrightarrow{OP}$ を \vec{a} , \vec{b} を用いて表せ。

2

[大阪大・理]

三角形 OAB の辺 OA, OB 上に, それぞれ点 P, Q をとり

$$\overrightarrow{OP} = a\overrightarrow{OA}, \quad \overrightarrow{OQ} = b\overrightarrow{OB} \quad (0 < a < 1, \quad 0 < b < 1)$$

とする。三角形 OAB の重心 G が三角形 OPQ の内部に含まれるための必要十分条件を a, b を用いて表せ。また, その条件を満たす点 (a, b) はどのような範囲にあるかを座標平面上に図示せよ。ただし, 三角形 OPQ の辺上の点は, 三角形 OPQ の内部に含まれないと考える。

3

[京都大・理]

$\triangle ABC$ に対し、辺 AB 上に点 P を、辺 BC 上に点 Q を、辺 CA 上に点 R を、頂点とは異なるようにとる。この 3 点がそれぞれの辺上を動くとき、この 3 点を頂点とする三角形の重心はどのような範囲を動くか図示せよ。

4

[京都大・文]

座標空間上に 4 点 $A(2, 1, 0)$, $B(1, 0, 1)$, $C(0, 1, 2)$, $D(1, 3, 7)$ がある。
3 点 A, B, C を通る平面に関して点 D と対称な点を E とするとき、点 E の座標を求めよ。

5

[筑波大・理]

座標空間において、原点 O を通り方向ベクトル $(\cos \theta, \sin \theta, 0)$ をもつ直線を L_θ とする。点 $A(2, 0, 1)$ から直線 L_θ に下ろした垂線と L_θ との交点を P_θ とする。

- (1) θ が実数全体を動くとき、 P_θ は xy 平面内の円周上を動くことを示し、その中心の座標と半径を求めよ。
- (2) θ が $0 \leq \theta < \frac{\pi}{2}$ の範囲を動くとする。三角形 OAP_θ の面積の最大値と、そのときの P_θ の座標を求めよ。

6

[一橋大]

大きさがそれぞれ 5, 3, 1 の平面上のベクトル \vec{a} , \vec{b} , \vec{c} に対して, $\vec{z} = \vec{a} + \vec{b} + \vec{c}$ とおく。

- (1) \vec{a} , \vec{b} , \vec{c} を動かすとき, $|\vec{z}|$ の最大値と最小値を求めよ。
- (2) \vec{a} を固定し, $\vec{a} \cdot \vec{z} = 20$ を満たすように \vec{b} , \vec{c} を動かすとき, $|\vec{z}|$ の最大値と最小値を求めよ。

1

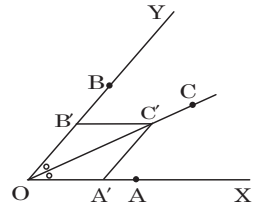
[神戸大・文]

(1) $\overrightarrow{OA'} = \frac{\vec{a}}{|\vec{a}|}$, $\overrightarrow{OB'} = \frac{\vec{b}}{|\vec{b}|}$ とおくと, $\overrightarrow{OA'}$, $\overrightarrow{OB'}$ は, それぞ

れ \vec{a} , \vec{b} と同じ向きの単位ベクトルである。

これから, $\overrightarrow{OA'} + \overrightarrow{OB'} = \overrightarrow{OC'}$ とすると, 線分 OC' は OA' , OB' を隣り合う 2 辺とするひし形の対角線となる。

よって, t を実数として, $\overrightarrow{OC} = t\overrightarrow{OC'} = t(\overrightarrow{OA'} + \overrightarrow{OB'})$ である点 C は, $\angle XOY$ の二等分線上にある。



(2) $|\vec{a}| = 2$, $|\vec{b}| = 3$ なので, (1) より,

$$\overrightarrow{OP} = t\left(\frac{\vec{a}}{2} + \frac{\vec{b}}{3}\right) \dots\dots\dots ①$$

ここで, OD の中点を A として, 点 D を定義すると, $|\overrightarrow{AD}| = 2$, $|\overrightarrow{AB}| = 4$ から, 実数 s を用いて, (1) より,

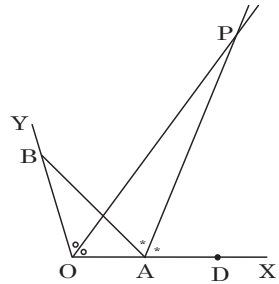
$$\begin{aligned} \overrightarrow{OP} &= \overrightarrow{OA} + s\left(\frac{\overrightarrow{AD}}{2} + \frac{\overrightarrow{AB}}{4}\right) = \vec{a} + s\left(\frac{\vec{a}}{2} + \frac{\vec{b} - \vec{a}}{4}\right) \\ &= \left(1 + \frac{s}{4}\right)\vec{a} + \frac{s}{4}\vec{b} \dots\dots\dots ② \end{aligned}$$

\vec{a} , \vec{b} は 1 次独立なので, ①②より,

$$\frac{t}{2} = 1 + \frac{s}{4} \dots\dots\dots ③, \quad \frac{t}{3} = \frac{s}{4} \dots\dots\dots ④$$

③④より, $\frac{t}{2} = 1 + \frac{t}{3}$, $t = 6$

よって, ①から, $\overrightarrow{OP} = 6\left(\frac{\vec{a}}{2} + \frac{\vec{b}}{3}\right) = 3\vec{a} + 2\vec{b}$



[解説]

角の二等分線をひし形の対角線として表現する有名問題です。なお, (2)の点 P は, 三角形 OAB の傍心の 1 つです。

2

[大阪大・理]

条件より、点 G は $\triangle OAB$ の重心であり、 $\overrightarrow{OP} = a\overrightarrow{OA}$ 、 $\overrightarrow{OQ} = b\overrightarrow{OB}$ なので、

$$\overrightarrow{OG} = \frac{1}{3}\overrightarrow{OA} + \frac{1}{3}\overrightarrow{OB} = \frac{1}{3a}\overrightarrow{OP} + \frac{1}{3b}\overrightarrow{OQ}$$

G が $\triangle OPQ$ の内部に含まれるための必要十分条件は、

$$\frac{1}{3a} > 0, \frac{1}{3b} > 0, \frac{1}{3a} + \frac{1}{3b} < 1$$

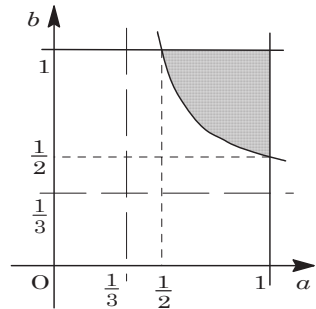
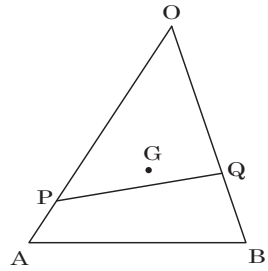
$0 < a < 1, 0 < b < 1$ より、 $\frac{1}{3a} > 0, \frac{1}{3b} > 0$ は成立し、

$$\frac{1}{3a} + \frac{1}{3b} < 1$$

変形すると、 $\frac{1}{3b} < \frac{3a-1}{3a}$ となり、 $3a-1 > 0$ のもとで、

$$b > \frac{a}{3a-1} = \frac{1}{3} + \frac{1}{3(3a-1)}$$

よって、点 (a, b) の範囲を図示すると、右図の網点部となる。ただし、境界線は含まない。



[解説]

まったく同じ問題に出会ったことがあるという感覚がありますが、単なる既視感かもしれません。

3

[京都大・理]

BC 上に点 Q を固定し, $0 < p < 1, 0 < r < 1$ として,

$$\overrightarrow{AP} = p\overrightarrow{AB}, \quad \overrightarrow{AR} = r\overrightarrow{AC}$$

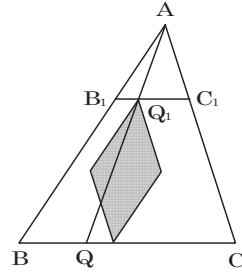
$\triangle PQR$ の重心を G とすると,

$$\overrightarrow{AG} = \frac{1}{3}(\overrightarrow{AP} + \overrightarrow{AQ} + \overrightarrow{AR}) = \frac{1}{3}\overrightarrow{AQ} + p \cdot \frac{1}{3}\overrightarrow{AB} + r \cdot \frac{1}{3}\overrightarrow{AC}$$

ここで, $\frac{1}{3}\overrightarrow{AQ} = \overrightarrow{AQ_1}, \frac{1}{3}\overrightarrow{AB} = \overrightarrow{AB_1}, \frac{1}{3}\overrightarrow{AC} = \overrightarrow{AC_1}$ とおき,

線分 AB_1, AC_1 を隣りあう 2 辺とする平行四辺形を S_A とおく。

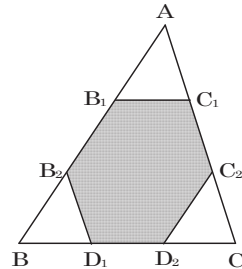
さて, p, r を $0 < p < 1, 0 < r < 1$ を満たすように動かすと, 点 G は, S_A を $\overrightarrow{AQ_1}$ だけ平行移動した平行四辺形 S_{Q_1} の内部を動く。



ここで, 点 Q を辺 BC 上で点 B から点 C まで動かすと, 点 Q_1 は線分 B_1C_1 上を点 B_1 から点 C_1 まで動く。その結果, 平行四辺形 S_{Q_1} は平行移動し, その通過領域が点 G の動く範囲である。

以上より, 辺 AB の三等分点を B_1, B_2 , 辺 AC の三等分点を C_1, C_2 , 辺 BC の三等分点を D_1, D_2 とおくと, 点 G は六角形 $B_1B_2D_1D_2C_2C_1$ の内部を動く。

すなわち, 点 G の動く範囲は右図の網点部である。ただし, 境界線は含まない。



[解説]

独立に動く点が 3 つあり, そのうちの 1 つを固定して考えた解です。そのプロセスが記述しにくく, そのため演習するのに適した問題です。

[京都大・文]

4

まず, $\overrightarrow{BA} = (1, 1, -1)$, $\overrightarrow{BC} = (-1, 1, 1)$ となり,
 平面 ABC の法線ベクトルを $\vec{n} = (a, b, c)$ とおくと,

$$\overrightarrow{BA} \cdot \vec{n} = a + b - c = 0$$

$$\overrightarrow{BC} \cdot \vec{n} = -a + b + c = 0$$

よって, $a = c$, $b = 0$ となり, $\vec{n} = a(1, 0, 1)$

すると, 平面 ABC の方程式は,

$$(x-2)+z=0, \quad x+z=2 \cdots \cdots \textcircled{1}$$

さて, $E(p, q, r)$ とおくと, $\overrightarrow{DE} = (p-1, q-3, r-7)$

$\overrightarrow{DE} \parallel \vec{n}$ より, t を実数として $\overrightarrow{DE} = t\vec{n}$ となり,

$$(p-1, q-3, r-7) = t(1, 0, 1)$$

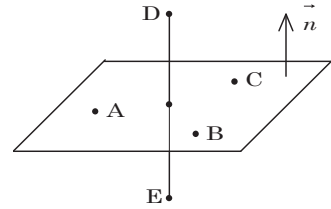
よって, $p = t+1$, $q = 3$, $r = t+7 \cdots \cdots \textcircled{2}$

また, DE の中点 $(\frac{p+1}{2}, \frac{q+3}{2}, \frac{r+7}{2})$ は, 平面 ABC 上にあるので, $\textcircled{1}$ より,

$$\frac{p+1}{2} + \frac{r+7}{2} = 2, \quad p+r+4=0 \cdots \cdots \textcircled{3}$$

$\textcircled{2}\textcircled{3}$ より, $2t+12=0$, $t=-6$

$\textcircled{2}$ から, $p=-5$, $q=3$, $r=1$ となり, $E(-5, 3, 1)$ である。



[解説]

京大では, 本年度より, 出題範囲に含まれた「代数・幾何」時代の頻出題です。平面の方程式の基本事項は「ピンポイント レクチャー」を参照してください。

5

[筑波大・理]

(1) t を実数とし、 $\vec{u} = (\cos \theta, \sin \theta, 0)$ とおくと、

$$L_\theta : (x, y, z) = t\vec{u} = t(\cos \theta, \sin \theta, 0)$$

これより、 L_θ 上の点 P_θ は、 $P_\theta(t \cos \theta, t \sin \theta, 0)$ とおくことができる。

ここで、 $A(2, 0, 1)$ から、

$$\overrightarrow{AP_\theta} = (t \cos \theta - 2, t \sin \theta, -1)$$

条件より、 AP_θ と L_θ は直交するので、 $\overrightarrow{AP_\theta} \cdot \vec{u} = 0$

$$\cos \theta(t \cos \theta - 2) + t \sin^2 \theta = 0, \quad t = 2 \cos \theta$$

よって、 $P_\theta(2 \cos^2 \theta, 2 \sin \theta \cos \theta, 0)$ と表せる。

さて、 $P_\theta(x, y, z)$ とおくと、

$$x = 2 \cos^2 \theta, \quad y = 2 \sin \theta \cos \theta, \quad z = 0$$

すると、 $x = 1 + \cos 2\theta$ 、 $y = \sin 2\theta$ から、点 P_θ の描く円の方程式は

$$(x-1)^2 + y^2 = 1, \quad z = 0$$

すなわち、 xy 平面上で、中心 $(1, 0, 0)$ 、半径 1 の円を描く。

(2) $\overrightarrow{OA} = (2, 0, 1)$ 、 $\overrightarrow{OP_\theta} = (2 \cos^2 \theta, 2 \sin \theta \cos \theta, 0)$ より、 $0 \leq \theta < \frac{\pi}{2}$ のとき、

$$\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OP_\theta} = 4 \cos^2 \theta, \quad |\overrightarrow{OA}| = \sqrt{5}$$

$$|\overrightarrow{OP_\theta}| = \sqrt{4 \cos^4 \theta + 4 \sin^2 \theta \cos^2 \theta} = \sqrt{4 \cos^2 \theta (\cos^2 \theta + \sin^2 \theta)} = 2 \cos \theta$$

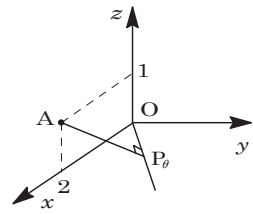
ここで、 $\triangle OAP_\theta$ の面積を S とおくと、

$$\begin{aligned} S &= \frac{1}{2} \sqrt{|\overrightarrow{OA}|^2 |\overrightarrow{OP_\theta}|^2 - (\overrightarrow{OA} \cdot \overrightarrow{OP_\theta})^2} = \frac{1}{2} \sqrt{5 \cdot 4 \cos^2 \theta - 16 \cos^4 \theta} \\ &= \sqrt{5 \cos^2 \theta - 4 \cos^4 \theta} = \sqrt{-4 \left(\cos^2 \theta - \frac{5}{8} \right)^2 + \frac{25}{16}} \end{aligned}$$

すると、 $\cos \theta = \sqrt{\frac{5}{8}} = \frac{\sqrt{10}}{4}$ 、 $\sin \theta = \sqrt{1 - \frac{5}{8}} = \frac{\sqrt{6}}{4}$ のとき、 S は最大値 $\sqrt{\frac{25}{16}} = \frac{5}{4}$

をとる。このとき、 P_θ の座標は、 $x = 2 \times \frac{5}{8}$ 、 $y = 2 \times \frac{\sqrt{10}}{4} \times \frac{\sqrt{6}}{4}$ から、

$$P_\theta \left(\frac{5}{4}, \frac{\sqrt{15}}{4}, 0 \right)$$



[解説]

(2)では、有名な三角形の面積公式を利用しています。

6

[一橋大]

(1) $|\vec{a}|=5, |\vec{b}|=3, |\vec{c}|=1$ より,

$$|\vec{z}|=|\vec{a}+\vec{b}+\vec{c}|\leq|\vec{a}+\vec{b}|+|\vec{c}|\leq|\vec{a}|+|\vec{b}|+|\vec{c}|=9\cdots\cdots\textcircled{1}$$

①において等号が成立するのは、左側では $\vec{a}+\vec{b}$ と \vec{c} が同じ向きするとき、右側では \vec{a} と \vec{b} が同じ向きするときである。

よって、 $\vec{a}, \vec{b}, \vec{c}$ が同じ向きするとき、 $|\vec{z}|$ は最大値9をとる。

また、 $||\vec{a}|-|\vec{b}||\leq|\vec{a}+\vec{b}|\leq|\vec{a}|+|\vec{b}|$ より、 $2\leq|\vec{a}+\vec{b}|\leq 8$ となり、

$$|\vec{z}|=|\vec{a}+\vec{b}+\vec{c}|\geq||\vec{a}+\vec{b}|-|\vec{c}||\geq 2-1=1\cdots\cdots\textcircled{2}$$

②において等号が成立するのは、左側では $\vec{a}+\vec{b}$ と \vec{c} が逆向きするとき、右側では \vec{a} と \vec{b} が逆向きするときである。

よって、 \vec{b}, \vec{c} が \vec{a} と逆向きするとき、 $|\vec{z}|$ は最小値1をとる。

(2) 条件より、 $\vec{a}\cdot\vec{z}=20$ なので、 $\vec{a}\cdot(\vec{a}+\vec{b}+\vec{c})=20$ となり、

$$|\vec{a}|^2+\vec{a}\cdot(\vec{b}+\vec{c})=20, \vec{a}\cdot(\vec{b}+\vec{c})=-5\cdots\cdots\textcircled{3}$$

ここで、③の条件のもとで、

$$\begin{aligned} |\vec{z}|^2 &=|\vec{a}+\vec{b}+\vec{c}|^2=|\vec{a}|^2+2\vec{a}\cdot(\vec{b}+\vec{c})+|\vec{b}+\vec{c}|^2 \\ &=25+2\times(-5)+|\vec{b}+\vec{c}|^2=15+|\vec{b}+\vec{c}|^2 \end{aligned}$$

(1)と同様に、 $||\vec{b}|-|\vec{c}||\leq|\vec{b}+\vec{c}|\leq|\vec{b}|+|\vec{c}|$ から、 $2\leq|\vec{b}+\vec{c}|\leq 4\cdots\cdots\textcircled{4}$

④の範囲の値は、すべて③を満たしており、 $15+4\leq|\vec{z}|^2\leq 15+16$ から、

$$\sqrt{19}\leq|\vec{z}|\leq\sqrt{31}$$

よって、 \vec{b}, \vec{c} が同じ向きするとき、 $|\vec{z}|$ は最大値 $\sqrt{31}$ をとり、 \vec{b}, \vec{c} が逆向きするとき、最小値 $\sqrt{19}$ をとる。

[解説]

ベクトルの三角不等式の問題です。(1)で $|\vec{z}|=0$ となる場合があれば、この値がもちろん最小値ですが、このようなケースはありませんでした。なお、(2)では、ベクトルの和 $\vec{b}+\vec{c}$ を変化するベクトルとしてとらえています。